

ソーシャルの深化が拓く未来の可能性



日本アイ・ビー・エム株式会社
IBM フェロー
東京基礎研究所

浅川 智恵子

世界を変えるソーシャルの力

振り返ってみると2015年はソーシャルの力をあらためて感じた年でした。

10月にTED^{*1}で障がい者を支援する技術の重要性について講演する機会をいただきました。会場の観客の皆さんの反応は非常によく手応えを感じていましたが、後日動画になって公開された際に果たして会場での講演のようにうまく伝わるのか一抹の不安もありました。しかしそれは杞憂でした。12月に動画が公開されるとTwitterやFacebookを中心として「口コミ」が広がり、予想もしないほど多くの方に視聴していただき、2016年3月には再生回数は約100万回にも上りました。また講演は英語でしたが、動画公開直後から世界各国のボランティアの方々が字幕を作成してくださり、現在28カ国語の字幕が付いていることに驚いています。ソーシャルによって大きく変わりつつある世界を、自分自身の体験として再認識した出来事でした。

わたしは2014年9月から米国カーネギーメロン大学に客員教授として赴任していますが、日本のお

客様との共同研究や政府の委員会も続けています。このような物理的な距離を超えた活動を支えているのは、モバイルとソーシャルの技術群です。iPhoneを肌身離さず持ち歩き、IBM東京基礎研究所のチームと緊密なやりとりをしています。大学側の研究スタッフ・チームがまだ編成されていなかった頃には、iPhoneのテレビ電話機能を使って日本にいる研究員に研究用機材の確認をしてもらうこともありました。時差を除けば距離を感じることなく研究活動を進めることができます。

日本IBMでは2015年3月から障がいを持つ若者のためのインターンシップを開始しました。視覚や聴覚に障がいを持つ学生の就労環境は依然として厳しく、職種の広がりも十分ではありません。このプログラムでは、企業での就労を体験するとともに、プログラミングや英語などを学習し、社会で活躍するためのスキルを身に付けることを目的としています。約30名の参加者は、障がいのため通勤が難しいことに加えて現役の学生も多く、出社できる日数には制限がありました。そこで「IBM Connections」を用いた社内SNSをはじめ、タスク

管理システムや電話会議などあらゆるツールを活用することにしました。聴覚障がい者と視覚障がい者が参加する電話会議でのリアルタイム字幕など、新しい技術も積極的に導入し、12月末にはすべてのスケジュールを無事に終了することができました。今年も3月から同様のインターンシップ・プログラムを開始しています。障がい者就労を助けるツールとしてのソーシャルの力を改めて体感することができました。

わたしの身の回りのエピソードをいくつか紹介しましたが、皆様もソーシャルによる身近な変化を感じているのではないのでしょうか。人と人のつながりが、組織の中で、また組織を超えて世界規模で密接になり、新しい情報やアイデアが瞬く間に広がっていきます。ソーシャルを生かした新しいビジネスモデルも急速に広がっています。自動車配車サービス「Uber」はわたしもアメリカで便利に使っていますが、瞬く間に世界中に広がりました。カーシェアリング・サービス「Zipcar」や世界中のユニークな宿泊施設を探せる「Airbnb」もわずかな期間で普及しました。スマートフォンをはじめとした高性能なモバイル機器と高速なネットワークの普及、そしてソーシャルの深化が、未来として語られていた「すべての人がいつでもどこでもつながる世界」を現実のものにし、想像だにしていなかったさまざまなビジネスモデルを生み出しています。

ソーシャル、そしてコグニティブが創る未来

ソーシャルに続き、今後世界を変える技術は何でしょうか？ 希望も込めて「ロボット」に注目しています。わたしのような視覚障がい者にとって、例えば盲導犬の代わりに務めながら人間のガイドのように街を案内してくれるロボットの実現は大いに期待されることです。IBMがコグニティブ・コンピューターと呼ぶ「考える力を持つコンピューター」は、さまざまな分野でこれまで不可能だと思われていた技術の応用を現実のものに近づけています。

先日発表された日本語版「IBM Watson」をはじ

めとして、コンピューターはさまざまな質問に答える力を持ち始めています。また画像認識によって、看板の文字や置いてある物の種類、部屋の立体構造、そして人の表情に至るまで認識することが可能になってきています。こうした技術を結集して、障がい者や高齢者がもっと街を楽しむことができるように、周囲の環境を認識して案内するロボット「コグニティブ・アシスタント」の研究を、現在大学とIBMをまたいで進めています。

コグニティブ・コンピューターの背後には、実はソーシャルの力が生きています。コンピューターを学習させるためには「正解データ」が欠かせません。近年の急速な進歩には、アルゴリズムやハードウェアの進化に加えて、ソーシャルが生み出してきた大量のデータが重要な役割を果たしています。Twitterの書き込み、レストランのレビュー、写真や動画サイトへの投稿など、ソーシャルにおける活動の一つひとつがコグニティブ・コンピューターの進化の源泉となっています。企業内ソーシャルに蓄積された情報も、貴重な知見の宝庫として今後ますます活用されていくことでしょう。

* * *

ソーシャル、コグニティブ、そしてロボット。これまで別々の進化を遂げてきた技術群が有機的に結び付き、夢でしかなかった技術の応用が可能になる時代になりました。2020年には、東京オリンピック／パラリンピックに合わせてロボットの協議会が開催される予定で、わたしも諮問委員会のメンバーになっています。2020年はこれらの技術の進歩とオリンピック／パラリンピックの開催が交差する、まさにベストなタイミングです。世界中が注目するこの時に、ソーシャル、コグニティブ、そしてロボットを組み合わせた技術を社会の中でどのように活用していくのか、日本から世界に向けてアピールできれば素晴らしいことだと思います。世界そして未来を変える技術の進化・深化に今後ともご期待ください。

※1: ニューヨーク市に本部がある非営利団体。TEDが主催するカンファレンスでは、学術、エンターテインメント、デザインなど、さまざまな分野の人物がプレゼンテーションを行う。